京都新聞2012年８月15日（水）夕刊掲載

悠久の京を訪ねて PartⅢ Vol.1

KYOTO ARCHAEOLOGY CENTER

京は古（いにしえ）より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。
京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。
私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

西国三十三所巡礼札に込められた思い
―国宝清水寺本堂（清水の舞台）の発掘調査から―

■寺の歴史を物語る品々と西国三十三所巡礼

平成23年度に実施された清水寺本堂の発掘調査では、緑色や白色の釉（うわぐすり）で彩られた奈良時代の二彩陶器や鎌倉時代末期に中国から輸入された青磁花瓶（せいじかびん）や青磁香炉（せいじこうろ）など貴重な品々が出土しました。中でも、注目される遺物に木製の西国三十三所巡礼札があります。

巡礼札とは、巡礼者が観音菩薩の功徳を得る目的で、聖地、霊場に参拝した証に、年月日、住所、姓名、年齢、同行者などを書き、堂の柱や梁などに打ち付けたりして奉納する札のことです。

清水寺は、平安時代中頃以降、畿内を中心に形成された霊場の一つとなり、多くの参詣者を得ることになりました。なお文献上、西国三十三所の呼称の初出は室町時代のことです。

■本堂床下から出土した巡礼札とその思い

本堂床下の奥には江戸時代前期の再建時に積まれたとみられる石垣があります。この石垣の隙間に「享保14（1729）年」の江戸時代の年号を記す巡礼札が二つ折りにして差し込まれていました。偶然に札が落ち込む場所ではなく、意図的に持ち込まれたものと考えられます。この巡礼札の表には「願主浄信」と書かれており、浄信さんが奉納したことが明らかです。

ところで、この札の裏側には「為　おはな妙春信女」と書かれていました。この書き方から、これは同一女性の俗名と戒名（かいみょう）とみられます。浄信さんの身近にいた大切な女性の死を悼み、柱などに打ち付けられるのではなく、本堂の床下に納札されたと考えられます。

この巡礼札は江戸時代、清水寺へ巡礼した人々の思いをうかがわせる貴重な資料といえます。

享保14年の巡礼札

◉第27回 小さな展覧会より（8月18日～9月2日　向日市文化資料館で開催／月曜休み）

協力：公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　企画・制作：京都新聞COM